

第七回

世三ナール旅行

報告書

[ 於：淡路島モンキーセンター ]

58 / 7 / 26 · 27 · 28

甲南大学 谷口研究室

(目次)

1.	巻頭の辞	谷口 文章	1
2.	ゼミ旅行日程		4
3.	シンポジウム要旨		7
	A グループ	杉林 稔	
	B グループ	和田 浩一	
	C グループ	谷口 竜平	
4.	A グループ・メンバー		17
	奇形ザルにみる人間の宿罪	大野 幸彦	
	ゼミ旅行を終えて	迎 真弓	
	自然と環境	近藤 善美	
	奇形ザル問題を考える	黒川 禎三	
	第七回ゼミ旅行参加の意義	藤松 昭	
5.	B グループ・メンバー		25
	猿社会に接して	菅野 晃弘	
	討論のむずかしさ	杉浦 薫	
	ゼミ旅行に参加して	中村 恵理子	
	ゼミ旅行について	押柄 貞子	
	奇形ザルについて思ったこと	後藤 雅晴	
6.	C グループ・メンバー		33
	奇形ザルが教えてくれたもの	脇田 博代	
	淡路島モンキーセンターの衝撃	大森 優香	
	環境汚染についての自覚	桜井 智晴	
	ゼミ旅行に参加して	植木 通博	
	-----		
	「沈黙の春」の感想文	岡本 由美	
	「複合汚染」をよんで	川崎 智恵子	

7.	卒業論文要旨	43
	シュールレアリスムにおける 哲学的認識の問題について	梅田 良子
	人間本性および自然法について	西川 津也子
8.	甲南大学谷口研究室 昭和 58 年度年間活動報告	50
9.	編集後記	52

## 巻頭の辞

甲南大学 文学部 哲学 谷口文章

第七回ゼミ旅行の研修会が、昭和58年7月26日から28日まで淡路島モンキー・センターで開催された。従来の哲学、心理学、教養の分野における研究発表会とは相違し、今回はエンカウンター・グループの実習を引き継いだ形で、現地における研修体験が実行された。今後も春は研究発表会、夏は研修旅行というパターンが踏襲されるものと思われる。

当地のモンキー・センターでは、中橋 実所長の懇切なお話、また貴重な資料、そして大阪大学の比較行動学の研究者中道正之氏の解説などに接することができ、単なる討論会では得られない収穫があった。

参加者の最も強烈な印象は、現実に目の前にコータたち奇形ザルを見たことであろう。そして予期しないこととしては、ケージに入れられた実験用の、奇形発生の原因究明のためのサルを除き、野性状態にある奇形ザルたちを観察してみて、彼らが予想外の明るさと健全さを示していたことである。つまり彼らは、普通のサルと同じ様に、サル社会において自己存在を主張し、またそれが適切に認められていたことである。この事実は、センターのサル集団における群集密度の濃さに表われているように、個体間の親密さを示すであろうし、したがっていわゆる日本ザル社会における厳しい上下関係が、ここではゆるやかに隠やかな集団であることを意味している。また淡路島という南の暖かい風土にあるため食物が比較的豊富であること、すなわち生活環境に恵まれていることも立証していると考えられよう。このような集団としての親和性と、環境としての風土・食物の豊かさが、奇形ザルを通常のサルと同様に受け容れられる素地を形成していると推測される。

今回の体験によって奇形ザル一般についての暗いイメージは一掃され、むしろさわやかな、新鮮な驚きを感じると同時に、ひるがえって私たち人間の立場への反省が痛烈に促されたのであった。学生諸君の印象を聞いても、むしろ私たちはこのようなセンターのサルたちから社会における人間関係やモラルを学ぶべきではないか、という意見が多数を占めた。

とはいえ、私たちは奇形発生の原因を究明し、その現象についての正確な事実認識を行なわねばならないであろう。この原因は確定的なものとしては明らかにはされていないが、人間の利己主義的情念を中軸として世界的な規模における経済的な富の追求とその結果としての富の偏り——これがまた富の追求を加速する——によって環境汚染や破壊が進められたことに依るといえよう。例

えば、現在の日本の食料事情が、大半は外国からの輸入、しかも日本では規制されているけれども外国では多量に使用されている農薬によって汚染された食物を輸入し、それを私たちが、日々食べていることの恐ろしさを認識しなければならないであろう。それのみではない。日本でも、防毒マスクのようなものをつけて、害虫発生時には毎日農薬を散布している事実、また化学肥料によって異常に肥大した作物、雑草駆除のための除草剤がまかれているのである。そのようにして育てられた作物が、次にはワックスや防腐剤、着色料、保存料などが塗られ、添加され、加工されて私たちの口に入るのである。汚染は食物だけではない。排気ガス、中性洗剤等々。これらに加えて森林伐採、宅地造成、道路開発などの環境破壊がある。そして両者は相携えて、相乗効果を及ぼしているといえよう。

便利さ、虚飾、見栄えなどに追われる現代人の心は、まさに精神の貧困の状態にあると考えられる。私たちの心は、真に何を指して活動しようとするのか、それを改めて問い直さねばならないであろう。

一つ次のような例を挙げてみよう。もし毒の藻が1日に二倍ずつ増加して繁殖し、30日で池を生物の住めない破滅の状態をもたらすと仮定してみる時、私たちはいつ環境汚染・破壊の進行に気づくであろうか。多くの場合15日ぐらいという答えが返ってくるが、決してそんなに早く私たちは気づかない。というのも池の半分が汚染され破壊されているということに気づくのは、何とその池が減る前日である29日目なのである。私たちはようやく現代社会における環境汚染・破壊を認識し始めているのであるが、そのことは、すでに生命を支えている地球という池が29日目に達しているということの意味しているのではないであろうか。奇形ザルの出現による警告は、それを立証するかのようである。

私たちは科学が行なり事理的判断だけでは、人生観や世界観を満足させることはできないことを知っている。もはや、このような環境汚染・破壊の問題だけでなく、ライフ・サイエンスによる遺伝子操作や臓器移植などの問題に示されるように、そのような科学的真理を反省することなしに端的に実現してよいか否かを基礎づける「価値づけ」こそ必要とされよう。すなわち現代人に最も要求されることは、価値基準の転換なのである。哲学のような学問こそが、このような価値判断を可能にする。しかしながら、それは抽象的に方向づけを示唆し、促すことにとどまる。したがって現実の解決法は個人々に委ねられている。それゆえ、このような具体的方法を一つ一つ検討すべく、もっとさかんにしかも持続的に私たちは議論を続けていかねばならない。

再びセンターのサルの話にもどろう。彼らは実に隠やかな集団であった。そ

して象徴的にも思える、一つの遊びの動作を行なっていた。それはサルたちが、もちろん奇形サルも含めて、水飲場で手を水の中に入れしきりと水の泡を作り、手にすくい上げジッと眺めていることであつた。時にはそれを口許までもって行って、食べる行動をする。これは他のサルの集団ではあまり見られない現象であり、比較行動学研究者の中道氏は「このサルたちは、水に顔を写すナルシストですね」と言われたが、私にはそれ以上に、水の泡に浮ぶにじを追い求めている「夢見るサルたち」のように思えた。ボスサルや上位のサルが、幼い奇形サルを労る優しさ、成獣となった奇形サルの一人前の主張、希望のにじの泡を追い求めるサルたち、このような温和なサル文化は、孤独で、ぎすぎすした、自己中心的な私たち現代人の夢のない生き方に痛烈な批判の矢を放つものであろう。

見学のあと旅館でA,B,C,班の三グループに分かれてシンポジウムが開かれた。熱心な討論が聞わされたが、その内容については、本論の要約に譲ろう。

また卒論の中間報告も真剣な場で行なわれ、この3月には良い結果が出たことを報告しておく。

(昭和59年3月 記)

第七回 谷口ゼミナール旅行 スケジュール

7月に入り、夏休みも近づいてまいりました。ゼミナール旅行の詳しい予定が、決まりましたので、下記の通りお知らせいたします。

昭和58年7月5日

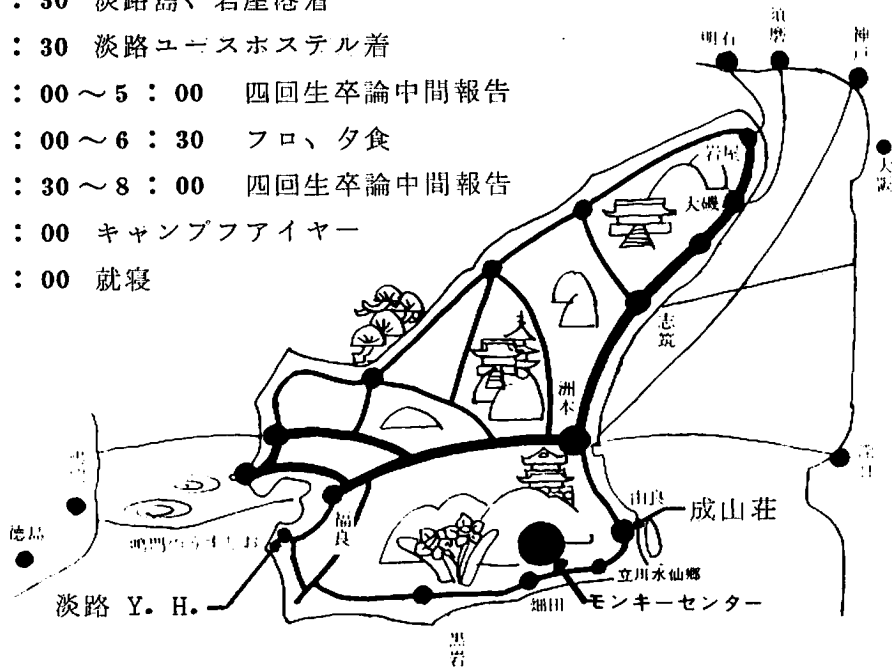
甲南大学文学部 谷口研究室

記

1. 集合： 7月26日（火）正午 国鉄明石駅改札口前  
（改札口は一つです）  
解散： 7月28日（木）午後6時頃 神戸中突堤
2. 携帯品： 水着、常備薬（酔いどめ等）、保険証のコピー、学生証（必ず持参のこと）、参加費残金、旅仕度。
3. スケジュール

26日（火）－1日目－

- 12：00 国鉄明石駅 集合
- 12：30～1：00 PM 播淡汽船乗船
- 1：30 淡路島、岩屋港着
- 3：30 淡路ユースホステル着
- 4：00～5：00 四回生卒論中間報告
- 5：00～6：30 フロ、夕食
- 6：30～8：00 四回生卒論中間報告
- 8：00 キャンプファイヤー
- 10：00 就寝



27日(水) - 2日目 -

7:00 AM 起床 朝食 清掃  
9:00 出発  
9:30 モンキーセンター着 研修開始  
11:30 ~ 12:30 昼食  
12:30 ~ 2:00 PM グループ・ディスカッション  
2:30 成山荘着  
3:00 ~ 6:00 海水浴  
6:00 ~ 8:00 フロ、夕食  
8:00 ~ コンパ

28日(木) - 3日目 -

7:00 AM 起床  
8:00 朝食  
9:00 ~ 10:30 ゼネラル・ディスカッション  
10:30 ~ 11:00 チェックアウト  
11:00 ~ 3:00 PM 海水浴 昼食 スイカ割り等  
4:00 州本港着  
6:00 頃 神戸中突堤着 解散

#### 4. 注意事項

ユース内では、禁酒禁煙です。

ユース内での規則は守ること。

酔った状態又は、寝不足での水泳は慎んでください。

(事故が起った場合の責任は負いかねます。)

#### 5. 不明の点及び、連絡は次の所まで

谷口ゼミ幹事

大野幸彦 ☎ 06-713-6263

押柄貞子 ☎ 0798-46-3305

谷口文章先生 ☎ 07712-3-9464

宿泊先：淡路ユースホテル (一泊目) ☎ 07995-2-0460

成山荘 (二泊目) ☎ 07992-7-0327



シンポジウム要旨

- A グループ 杉林 稔
- B グループ 和田 浩一
- C グループ 谷口 竜平

## シンポジウム要旨 (A班)

代表者 杉林 稔 (京都府立医科大学 三回生)

淡路島モンキーセンターで奇形ザルとそれを取り囲むサル社会を見学し、また所長や研究者からお話を伺った後に行われたグループディスカッションにおいて、私たちのグループでも、様々な視点からの意見・感想が述べられました。なにぶん、短時間だったので討議によってそれぞれの思考を深めることはできませんでしたが、奇形ザルを見たことの実感がまだ生々しく残っている時に集められた意見・感想は、私たちの奇形ザルに対する素直なりアクションとして貴重なものだと思います。ですから、私は、ここでは、私たちのグループで述べられた意見・感想をなるべくそのまま皆さんに紹介し、それに付随して、私なりに討議内容をまとめたいと思います。

### 意見1

「奇形ザルは他のサルよりも一生懸命生きているように見える」

#### 討議内容

私たちには、一個の人間として、あるいはヒトとして、十全に自らの「生」を発揮したいという根源的な欲求があるように思います。もちろん、そのような欲求は現実という厚い壁によって制約されますが、しかしそのような制約なしには真に「十全に自らの生を発揮」することはできないでしょう。つまり、私たちの生の力は壁による反作用なしには作用しようのないものなのです。私たちが力いっぱいその壁を押す時、私たちは自らの根源的な欲求を満していると言え、私たちの「生」は生き生きと、活気を帯びたものとなるでしょう。

奇形ザルが自らの障害という壁を渾身の力をこめて押している、しかもそれが悲そう感漂うものでなく生きるための当然の営為として行なわれている様を見ての上のような感慨は、実は私たちの方が、奇形ザルほどには「十全に自らの生を発揮」しえていないという、うしろめたさから来ているのではないのでしょうか。

### 意見2

「十数%の奇形ザルを抱えているにもかかわらず、サル社会が乱れないのは、人間社会が経済を中心とした社会であるのに対し、サル社会は自然を中心とした社会であるからではないか」

#### 討議内容

この意見は大いに納得できますが、私なりにつけ加えるとすれば、現在の日本の社会では、経済においてはとりわけ消費が前面に押し出されているということです。このような社会にあつては、私たちは、表面的な美しさ、小ぎれいさをそなえたイメージを買いもとめ、それらで身のまわりを固めることで自らを飾ることができます。そして私たちは表面的幸福感を味わうことができます。すでに私たちは、見栄えが理想からかけ離れたイメージが自らの身にはりつくことを極度に恐れるところまで来ています。つまり、その裏返しとして、神経質なまでに自らのまわりを皮層的な美的イメージで塗り固めようとしているのです。

そして、そのような社会にあつては当然日常なじまないイメージを刻印されたものははじき出されます。しかも、このことは、はじき出す側の人間が表面的幸福感の中で自らの本性的な自然を見落してしまっていることのあらわれでもあるのです。つまり、このようなイメージを刻印されたものをはじき出す社会に生き、それに慣らされてしまった現代の私たちの感性は、本来は私たちの活力の源である私たちの内なる自然をも感情の上でそぐわないものとして排除してしまふ傾向があると思います。これは一種の自己疎外とも言えるでしょう。

### 意見3

「奇形ザルに対する“かわいそう”とか“見ていられない”という感情は人間だけが感じるもので、サル社会ではそのようなことはないのではないか」

#### 討議内容

このように思えるのは、前出の意見のように、サル社会が自然を中心とした社会であるがゆえに奇形を自然のものとして何の抵抗もなしに受け入れることができるのに対し、人間社会は、効率の良さを中心とする経済機構から表面的で能率第一主義に合致しないものを社会的にはじき出している、つまり、前述の自己疎外の結果としての負のイメージが人間の自己意識から排除されていることから来るのでしょうが、ここで注意しておきたいのは、「かわいそう」という感情についてです。

現代社会に身を置いている私たちは、見慣れないものを目の前につきつけられた時、ある名状しがたい感情のざわめきを覚え、その時ふと不安な気持ちが脳裏に浮びます。その際、「自分たちと姿・形が違うもの、とりわけそれが負の方向に違うものに対しては、“かわいそう”という感情を持つものだ。」という社会通念が働いています。ひとたび言葉が浮ぶと、同時にそのような感情を実際に抱いたような錯覚に陥り、はじめに抱いた実質的な感情のざわめきはかき消されてしまいます。この錯誤の結果はじめて奇形ザルを他人事としてなが

めることができ、私たち自身の問題から切り離してしまいうのです。このことは先に述べた、内なる自然へのまなざしのゆがみとしての自己疎外の一つの例と考えられます。また逆に、はじめに抱いた感情のざわめきを安易に「かわいそう」という言葉と擬似感情で片づけるのではなく、異和を異和としてかかえこむことから始めるべきだということを示唆するものでもあると思います。

#### 意見4

「奇形児を産みやすい年代が自分たちの年代であることに大きなショックを受けた」

「あらゆる奇形はある意味での個性として受けとめるべきだ」

「奇形ザルの増加は人間社会への警告として受けとめるべきだ」

#### 討議内容

上の言葉はいずれも、奇形ザルの出現を他人事ではなく自分自身の問題としてとらえ直そうとする姿勢を持っています。社会問題として一般論的に取り扱うのではなく、あくまでも自分自身の生き方にかかわる問題としてあの炎天下の数時間の体験を考えていきたいと思います。

## シンポジウム要旨 (B班)

代表者 和田 浩一 (甲南大学 理学部 一回生)

私達は、モンキーセンターでの研修において、原因と結果とに問題を分けて、それぞれの問題を中心にして考えました。

淡路島は自然的であり、モンキーセンターのある所等は、実に清々しい場所でした。こんな所でなぜ奇形ザルが生れるのかが、非常に不思議であるとともに、逆にこんな所まで汚染されているのかと恐しくなりました。

私達がまず問題と感じたのは結果です。結果とは奇形ザルに対しての猿の群れの受入体制のことです。

私達多くが感じていたことですが、猿社会と人間社会における障害に対する対応のちがいです。猿の社会では、障害をもっている子猿に対して、3歳までは母親同様他の猿達もかなりの面倒を見ます。つまり子猿に対してはある程度の保護をして群自体が育てていきます。しかし3歳を過ても自立できない猿は、群から置去りにされます。奇形猿自身も、群にいるのだあれば自立しておりそれが全く他の猿と同等に生存していることになるのです。群自体は奇形ザルが機能的に劣っていても、他の猿と全く変りなく一匹の猿として受入ています。

人間社会はどうであろうか。

私達の班でも、人間社会よりも猿社会の方が、生き生きしているという意見が多かった。人間社会における障害者について、多くの人々は障害者を障害的な人間の感じで接していると思われる。そのため、その人に対して哀れみという個人的自己陶酔に陥ってしまう。

ところで、この哀れみと障害者に対する手助けするということのちがいを少し考えてみると、手助けするということに関しては、障害のないと思われる人でも、困っている時は助けてほしい時は、かならずあります。障害者のそれも同じもので、手助けすることには何ら特別な感情その他はいりません。ところが、哀れむというのは、その人を障害者のわくに入れて考えているために生じる感情で、こういう考え方の人が多いため私達の社会において生き生きした感じが失われているのでしょう。逆にいえばこの感じを取り戻すために、私達は個人がもっている障害者に対してのわくを取除くようにしなければなりません。つまり障害者と接触しているのだというまちがった態度を直し一人の人間として、精神的、人格的に接触することが自然であるのです。人間は猿とちがって、重度の障害者も生きていける環境があります。そういう環境に対してはより必要なことでしょう。

例えば、こういう話がありました。ある脳性マヒの子供が、今まで他人との接触がなく孤独にいたのが、他人との接触をもつようになって明るくなりました。明るくなった！即ち周りの環境によってその人自身もやはり、生き生きしてくるのです。

人間を何かの枠をかけて存在させるのではなく、我々一人一人が、他人に対して人格、精神のみを認めていくことによって、問題である結果に対処していけるのではないかと考えました。

次に、もう一つの問題の原因です。

「そうですね、近頃は奇形ザルの出産率は減ってきています。最も高かったのが、昭和40年前後に生れた猿の生んだ子猿のときでした。丁度、それは君らの子供に、……」この中橋さんの言葉は、私達の班でもショックでした。猿社会の結果が、私達の結果でもあるのです。

「私達自身の問題なのです」こういう意見が多かった。私自身もそう思います。事実、障害児出産率が3倍にもなっているらしいのです。私が知っている限りにおいて、おそらく動物の中で食物を作り出すのは、人間だけである。作り出すといっても自然農法においてのことです。それに対して我々人間は、できるだけ確実にかつ大量に、作り出そうとします。その手段が除草剤であり、農薬なのです。除草剤や農薬の使用は汚染につながるのでしょうか。合成添加物等は、複合汚染という点からも現在の科学力では、解明できない部分が多くあるのでそれによる立証は、少し無理があるでしょう。しかし農薬、除草剤等の人体への悪影響は、現在の科学でも立証できます。悪影響が立証できるとはいっても濃度や体内畜積の実験でも、人間で直接立証できるものではないから多くの人々は、それを認めない。故に今もって使用されています。しかし人間も生物であるのです。

そこで猿に話をもどしますが、猿は汚染を汚染として感知する能力はおそらくないでしょう。つまり、猿は汚染も自然の一部として受入れているのです。しかし人間は汚染を感知することができるのです。この汚染に関して我々は、人間の欲求と肉体との隔絶に存在することになるのです。このため精神の正しい判断が、非常な力で必要となるのです。私達の班でも文明と自然との葛藤や、文明社会の見直し等の意見もありました。しかし私自身、前出の肉体と欲求の隔絶の問題の理解、そしてそれによる精神の判断こそが、失われているのだと思います。このため、たとえ汚染を感知する能力があっても、私達は今猿が感じているそれと同様に自然であると信じてしまっています。

私は幾人かの人に、この問題について尋ねてみました。するとほとんどの人次のような答えが返ってきました。「確かに、自然のままがいいけどそんな

ことを言っていたら、食物がなくなってしまうから、しかたがないのところがいますか」しかたがない、つまり汚染自体を受入れているのです。私はこの答えから、2つの問題点があることに気付きました。まず第一点はこう答えた人のほとんどが、奇形ザルそしてベトナムの二重胎児、その他諸々の汚染実態と、自らの周囲の環境とを別の問題のように考えているようでした。この点については、汚染物質を体内に取り込んだとしても、直接的に身体の異常として現れにくく、また汚染自体の複合もあるので発現要因がつかみにくい外、この種の問題の困難なところではあるのですが、発現した状態の重大性を考えると科学的結論を待つより、自己の認識を高める必要があるのではないのでしょうか。

第二の点としては行動です。いったい私達には何ができるのででしょうか。前文の答えに於て推考すると、私達は結局どうすることもできないということをお認めざるをえません。私自身この点に関して考えてみましたが、私自身は社会運動もできませんし、頭の中で考えているだけで“実質的”な問題解決の手段、行動もできません。結局、私は行動に於てどうすることもできないと、痛感せざるをえませんでした。

しかしその後、それで良いのではと思うようになりました。というのは、つまり問題自身が存在しそれに対する意識をもち、そしてその問題を認識することが、今の私達にとって重要なのではないのでしょうか。

私達の班は、このモンキーセンターでの研修を最初として、これから先もこの問題を拡張した形で考えて行きたいと思います。

## シンポジウム要旨 (C班)

代表者 谷口 竜平 (奈良高専 化学工学科 三年生)

私たちは、淡路島モンキーセンターを見学して、身体全体で感じたことを話合いました。そして、私たちの班では、多数の意見を論じ合い、それを次のようにまとめました。

まず、全員が、群れの中の日本猿の表情は、四肢に奇形のあるものも、いわゆる正常なものも一緒に生き生きしているということを感じました。それに反して、ケージの中の猿は、皆表情に乏しいように思えました。群れの中では、奇形ザルも完全にその中に融込んでいて、少しの不自然さも見せなかったことには、新鮮なおどろきを覚えました。これは、猿には、「奇形」という概念がないために、「可哀想」という感覚がないからではないかと推測します。即ち、私たちが「可哀想」の裏に感じる「優越感」や「劣等感」といったものは彼らにはなく、それが故に不自然さというものを感じなかったのだと思います。

また、雄ザルが、我が子のように奇形ザルを育てている姿にも深い感銘を受けました。このこともまったく不自然さを感じさせることなく行なわれていました。この行動は、それが奇形であるからではなく、「弱者をいたわる」という、この猿社会が存続するための根本であるような気がします。

私たちは、前述のような感動ばかりではなく反省や危機感も与えられました。猿は、生物学的にも人間に近いので、現実に猿社会で発生している奇形が、人間に発生しないということはまず考えられません。人間は、その生活を豊かにするために、様々なものを造り上げて来ました。今日のような生活ができるのも発達した文明のおかげだとも言えるでしょう。しかし、心の豊かさという点ではどうでしょう。また、生命の危機という点ではどうでしょう。私たちの周囲には、常に危険な状態——それは、自然のものであったり、人工のものであったりするのですが——にさらされています。その中でも、身体を潜在的に冒し、知らず知らずのうちに子々孫々に至るまで影響を与えるようなものは最もたちの悪いものといえるでしょう。人間の作り出した化学薬品は、まさにそういった力を持っています。おそらく、モンキーセンターの奇形ザルも、このような物質の作用が強く働いたと思われます。現在の文明は、このような物質を作り出すことによりかなりの力をそそいで来ました。しかし、その効果を十分に考慮せず経済性によってのみ使用する傾向にあるようです。私たちはこのようにして、どれだけの生態系を変化させてしまったことか。



今、私たちはもう一度反省してみる必要があるのです。

物質的な側面だけでなく、精神的な側面でも考えなおす時期が来ているようです。近年エンカウンターグループが米国の各地で行なわれています。これは、人と人とのふれあいがなくなって来たことに対して現れて来た傾向であると思われます。文明が高度に発達している所では、大なり小なり考えられることです。日本においても、人間同志のふれあいは乏しくなって来ています。文明の発達は人の心を貧しくするものなののでしょうか。私たちは、かならずしもそうではなく、私たちの努力が足りないのだという立場を取りたいと思います。私たちは、文明の中で生きていかなければならない動物であるにもかかわらず、自然の中でしか本当に私たちの求めるものは育たないように思えます。そして、文明とは、今のように自然を根こそぎ破壊してしまうようなものであってはいけません。それは、私たちから魂を消滅させてしまうものでしかないのですから。現代人は、その知恵故に、文明を発達させ、無知なるが故に精神的な貧困をまねいた、いわば“精神的奇形”とさえ思えるのです。

A グループ・メンバー

代表者 杉林 稔

大野 幸彦

迎 真弓

近藤 善美

黒川 禎三

藤松 昭

## 奇形ザルにみる人間の宿罪

甲南大学 経済学部 三回生 大野 幸彦

淡路島モンキーセンターを後にして、僕は何ともやり切れない気持ちをぬぐうことができなかつた。それは単に、奇形ザルが悲惨であつたからという感覚的なものにとどまらず、人間存在そのものに対する疑問と困惑であつた。

日本ザルの奇形は、全国的に見ても、えづけが始まると同時に、急速に増加している。このことから、奇形が遺伝によるものより食物による環境から生れたと考えるのは自然だ。そして様々な客観的データもそれを裏付けている。

食物による四肢障害。そしてそれが、人間に非常に近いとされる日本ザルに多発している現実。しかし、行政は「人間への直接の影響がはっきりしない」と関心を寄せない。こと環境や、公害に対して私達は、「疑わしきは罰せよ」の態度で接すべきではなかつたのであろうか。それが、高度成長期に「公害大国」の汚名を着た教訓ではなかつたか。

しかし、飽食し無感覚になつた人間は、関心を寄せないばかりでなく、あろうことか、「淡路島のイメージダウンにつながる」とか「奇形ザルで金もうけをしている」といったヒボウや中傷を浴びせるのである。実際に、センターへ行って実態を眼のあたりにし、所長の中橋さんらの献身的な活動を垣間見れば、こんな言動はできない筈である。

前述したように、行政は人間への影響がでない限り動こうとはしない。そう、影響がでるまで待っているのである。どんなことでもそうだが、場当りの対策には、破たんがくる。そして、「汚染」という問題には、「蓄積」がつきものであり、言ってみれば「発病までの潜伏期間」が存在する。従つて、「発病」してからではどうにもならないことが多いのである。そこで予防策を事前に確立させなければならない。

幸か不幸か、人間は潜伏期間が長い。また、ある人に言わせると、人間はあらゆる動物の中で、最も公害に対する抵抗力が強いそうである。

経済効率を追い求めて、生態系を破壊する生産（化学肥料や農薬に代表される）を続け、それに伴う公害に対しては、抵抗力が強い……。これではまるで人間は、地球をむしばむバイ菌のようではないか。

不幸なことに、サルたちは「潜伏期間」が短かつたらしい。いや正確に言えば、彼らは自然の異状に敏感なのである。そして人間が気づくのでは遅すぎるので、警告を出してくれているのである。少なくともそう考えるべきな

のだ。

サルのえさには、アメリカ産の大豆も多く含まれる。これは戦りつすべきことである。アメリカの穀物と言えば、全世界が消費者だと言っても過言ではない。すなわち、地球的規模で、「発病」の秒読みが始まっている……。これが疑心暗鬼に終ればいいのだが。

中橋さんが訴えるように、結局は、行政が動かなければ、どうにもならないのが現状かもしれない。しかし、その行政を動かすのも最終的には、消費者たる私達である。飽食してしまう前に、できる限り感受性を研ぎすまし、「とにかく何とかしなければ」という意識を持つこと。そこから始めて行くしかないのではなからうか。

### ゼミ旅行を終えて

甲南大学 理学部 一回生 迎 真弓

今回の旅行は、高校時代までの遊び中心のものではなく、何かしら考えさせられることが多いものであった。

まず、参加前に必読書の「複合汚染」を読んで、食生活をもう一度注意深くみつめなおさなければならぬと思った。ただ単に「調理に便利だから」とか「見た目がいいから」と言っただけでは、形のいい野菜を買って食べているのは、どうだろうか。殺虫剤たっぷりの野菜を特に選んで高い値段で買うなんて……。食料が製品化されている現在、いったい我々は何をすればいいのだろうか……。などと、考えながら旅行に参加した。

淡路島モンキーセンターでは、何か言葉にできないものを感じた。ただ単に「かわいそう」だけではすまない多くの問題があると思う。それは、我々人間も同じような危険にさらされているということです。

人間の奇形は、サルの奇形にほぼ一致する点があるという。またサルで奇形を産みやすい年代は、我々と同年代であるという。考えてみれば、恐ろしいことである。あのケージにいたサルと同じような人間が生まれてくるとしたら……。親たちは狂ってしまうのではないか。サリドマイド事件のときのように。また、社会も。モンキーセンターのサル社会は、奇形がいても何ら変化なかったというが、人間社会ではそうはいかないと思う。障害者のいる家庭は、周囲の人に避けられてしまいがちである。やはり、異質のものとしてみられるからだと思う。以前、電車で障害者の方が、座席に座っていた。混んでいたのに、だれもその人の隣りに座ろうとしなかった。この場

合でも、周囲の人々の中に“異質感”があったのだと思う。同じ人間であるにもかかわらず。「こういうことが、頻繁に起こってはいけない」という忠告が、この奇形ザルだと思う。よく動物実験で、添加物A用のモルモットがガンになると「発ガン性物質 添加物A」などと、マスコミなどで騒ぎたてる。この奇形ザルはどうなのか？ 形はモルモットより大きい。いくら人間に近い動物にこの様な状態が生じているのに、研究者たちは資金がないからといって調べないという。サルの奇形が、人間には全く無関係のことならばいいのだが…。今のところ断言できないと思いませんか？ これから研究が必要だと思う。たとえ、人間に無関係であったとしても。

はじめてのゼミ旅行。大変充実したものであったと思う。こんなに真剣に問題に取り組んで、意見交換できることは、すてきなことだと思う。また、卒論中間報告で、私は予備知識がなかったのだが、何か一つ理解しようと努めた。けれど、結局理解できなかった自分に、腹立たしさを覚えただけであった。本当に情けなかった日がたつにつれ、自分知識がほんの上っ面しかないことが今わかってよかったと思うようになった。今回のゼミ旅行で幾分変わった自分でありたいと思った。

## 自然と環境

追手門学院大学 文学部 二回生 近藤 善美

今回のゼミ旅行は従来のような発表はなく、気持ちが随分楽だったが、奇形ザルを見ることについて、何か恐怖があった。モンキーセンターの坂道を登っていくと、やがて、かわいらしい子ザルを連れた母ザルに出会い、「こんなにかわいらしいサルの中に、奇形ザルが本当にいるのか」と疑いたくなった。群れに放されている奇形ザルは行動するのに困難なように見えたが、生きている様子は他の健康なサル達と全然違いなく思われた。しかし、オリに入れられている奇形ザルを見ていると、だんだん胸がしめつけられて涙が出そうになった。「どうして僕たちこんなになったの？」と、何の罪もない奇形ザルが、理由もわからずキョトンとして、私たちに言っているように思われた。奇形ザルは、自然の中で生きているサルにではなく、えづけされたサルの中に多発しており、奇形の原因は、えさとして与えられた小麦、大豆、ミカン、リンゴに含まれている農薬ではないかと考えられている。頭脳の発達している人間が作り出して深く考える能力をもった人間が無思慮に使いまくった農薬は、ど

れほどの意味のあるものだったのだろう。結局は、自然界のバランスを崩し、自らの命をも危うくしている。自然あつての生命であることを、人間だけが忘れたのではないだろうか。人間社会にだけ通用する「経済」というものさしで全てを測ることができる、と考えた人間の大きな錯覚が、自然を破壊している。今日、このように奇形ザルが身をもって示している警告を認めて、今対処することが、奇形ザルへの償いであり、私たち人類のためでもある。サルに現れる四肢の奇形は、人間の臨床例と酷似しているのだから。

モンキーセンターで聞いたお話は、非常に衝撃的だった。中でも一番ショッキングだったのは、昭和35年から昭和45年までに生まれた雌ザルが奇形を産む確率が非常に高いということだった。サルのことも人間にあてはまると考えられる。すると、この期間中に生まれたのは、私たちの年代である。将来に夢をもっている時にこの事を知り、ガク然となった。私たちの世代はどうなるのだろう？ このような心配があつては、結婚するのも不安になる。しかし、奇形ザルは奇形ザルを産まない。即ち、奇形は遺伝的要因ではないことが今のところ明らかになっている。ならば、私たちの子どもが生まれて育つ時期に、環境が少しでも改善されていれば、その子が不運であっても次の世代ではそのような事を体験せずに暮せるだろう。しかし、環境改善とひと口に言っても非常に困難で、中橋さんが言っておられたように、国も県も市も動こうとはしない。今のところ、個人で出来ることをするしかない。奇形ザル問題に負けてはならないし、負けたくない。私たちの子孫を守ることは、今の私たちにしかできないことである。

今年の6月の末にアラスカへ行って、雄大な自然、その中で生きている野生動物を見た時には、高価なもの、人間社会でもてはやされるものなど何も欲しくないと思った。アンカレッジ空港の免税店には、トラサルデー等のブランド商品が並らべてあつたけど、そんなものを手に入れるために目の色を変えている人間が、何だかおろかに思えてきた。自然を手放し、心がさみしくなった都会人ほど、必要以上に高価なものを欲しがらる。そして、ますます心が貧しくなっていく。大自然の摂理とくらべると、ほんのちっぽけな人間の浅知恵が自らの生命を脅かすようになった。自分も自然の一部だということを忘れて。

## 奇形ザル問題を考える

甲南大学 経済学部 二回生 黒川 禎三

私は今回のゼミ旅行が初めてであり、一体みんなはゼミ旅行で何をしているのかわからないので、最初は少し心配でした。それに自分はあまり哲学のことがわからなかったのですが、今回は淡路島へサルを見に行くという比較的単純なものでしたので、それでは行ってみようと思ったわけです。

以下、淡路島モンキーセンターでサルの生態を見て自分なりに思ったことを書きますが、最初は奇形ザルを見て「かわいそうだな。」としか感じませんでしたし、ましてや自分に関係のないことだと思っていましたが、センターの所長さんの話しを聞いているうちに、少しずつこれは我々人間にも直接関係があるとわかってきました。奇形ザルが生まれる直接的原因は、化学物質、特に食品添加物、防腐剤などであり、そのサルたちが与えられているえさは、日常、人間が食物としているものと何ら変わりません。そのために人間の間でも奇形の子供が生まれる確率がどんどん増えているそうです。

この点においては、政府、及び企業に責任があります。資本主義社会においては、何事も収益、生産物向上が第一目標となってしまう肝心の人間一人一人の安全がおびやかされていると思うのです。農薬にしても、もっと開発されれば安全性が高いものを生産できるのに、コストがかかるとして、安価でしかも毒性の強い農薬を使ってしまうのはどうも矛盾していることです。政府に対しても何らかの処置をとってもらいたいのですが、ここで一つ問題があります。それは、我々日本人が食べているものや、サルがえさとして与えられているものの中には諸外国から輸入されているものが大変多いということです。そのため、高い安全基準を設けたりすると、（今でも外国から安全基準が高いと文句が出ているが）新たに貿易問題が再燃し、そのため、必然的に非常に高度な外交問題に発展しかねません。（外交、経済問題に対して重きを置くのは、私が経済学を専攻しているからかもしれませんが。）しかし、政府が本当に国民の安全を考慮しようと思うのなら、より確実な安全基準を設け、そして、諸外国とその問題について討議する場を設けるべきです。つまり日本だけでなく外国の協力を求めてこそ初めて解決できる問題であると思います。

我々が日常、口にしている食物で、農薬や防腐剤や食品添加物が入っていないものは、まずないといってよいでしょう。奇形ザルはこのことを如実に物語らせ、そして我々人類に警告していると思います。

我々がそのような食品を食べても奇形になったりすることはまずありえない

ことだと思いますが、我々の次の世代、そしてそのまた次の世代の子供達にとって、今が一番大切な時ではないでしょうか。我々は、政府に対して何らかの処置を行ってほしいと思います。何故なら本当に、被害にあうのは政府ではなく、我々国民なのですから。

(P. S. そう書いておきながら、カップヌードルがおいしいと思って、なかなかやめられない僕でした。)

## 第七回ゼミ旅行参加の意義

奈良高専 電気工学科 五年生 藤松 昭

今回のゼミ旅行では、以前のそれとはまったく異なった経験をすることが出来たと思います。以前のゼミ旅行では、ほとんどの時間を研究発表に費し、“観念的操作”に徹しており、実感に乏しいという嫌いがありましたが（普段そういったことをほとんどしない私にとっては非常に有意義ではありますが）今回は、目で見て、肌で感じて問題意識を持つことが出来ました。しかも、前回のゼミ旅行では、“複合汚染”というテーマを論じ合い異なる論法、異なる見地から同様の結論を導き、全ての参加者が強い関心（危機感？）を持つに至ったという下地があったことは、その問題を単に不安や恐れに留めず、近い将来にかならずや各人各様の良い結果をもたらすものと思います。一つのテーマの“観念的操作”と“実習”を終えた今、もう一度論じ合える機会を得られればたいへん幸せです。

さて、今回のゼミ旅行への参加を私はかなりためらいました。その最大の理由は、奇形ザルを見るということがたいへん苦痛に思えたからです。しかし、「人間には、どんなに苦痛であってもそれを進んで受けなければならないこともある」という教えと、ゼミ旅行の最大の主旨の一つが正にその言葉そのものである（と思わざるを得ない）ことを考えると、嫌だけでは済まされないことを知り、参加するに至ったのです。それで、モンキーセンターに着いてからも猿があまり出て来ていなかったのも内心“ホッ”としたものでした。見学以前にもテレビ・新聞・ビデオ等で奇形ザルをしばしば見て来ましたが、それで感じたことは、“かわいそう”とか“自分は五体満足に生れてよかった”などということだけでした。そして、それを実際に見てもそう感じるだろうと予期していました。しかし、現実には、当初の予期とは裏腹に、“なんとさわ



やかに、なんと直向きに生きているのか”と浸み透るように感じました。そして、何か優越感のようなものをもって接しようとした自分を恥かしく思い、彼らにカメラを向けることすらおこがましく思えました。そのせいか、奇形ザルの問題を見るべきようにして見られたと思います。

猿の問題をそのまま人間にあてはめることには多少無理があるかもしれませんが、近い将来に同様なことが人間にもおこるということは、非常にあり得ることです。私達にはもはやそれをくい止めることは不可能なのかもしれません。しかし、もっと未来のためにそれを最少限に止める努力をすることは、そういう時代に、どういった態度で対処するかということであると思います。私たち人間は、何かものごとを行うとすぐに構えてしまうので、結局は苦しんだ後で何も残っていなかった、などということになることも多々あります。しかし、モンキーセンターのサルを見ていると（当然のことかもしれませんが）そういった構えということがまったく見られなかったように思います。私達は、心の痛みを感じ合い、お互いを助け合い、なおかつさわやかに生きていかなければならないと今回のゼミ旅行で学びました。心の痛みを感じながらもさわやかに生きるということは、非常に難しいことかもしれません。しかし、そうしなければならないという現実を見て来た以上、より高い次元での問題意識を持って自己の洗練をしなければならないのです。

以上のようなことを痛感したのが、今回のゼミ旅行の最大の収穫であったと思っています。来たるべき時代に私がどのような態度をとるべきかということ、まったくわかりません。しかし、そのときにとるべき態度で対処出来るという自信というようなものだけは身につけておきたいと思っています。

最後になりましたが、この新鮮なショックを受けるにふさわしい環境でゼミ旅行を開催して下さいました谷口先生をはじめ、甲南大学の方々に心よりお礼を申し上げます。

B グループ・メンバー

代表者 和田 浩一

菅野 晃弘

杉浦 薫

中村 恵理子

押柄 貞子

後藤 雅晴

## 猿社会に接して

甲南大学 経済学部 二回生 菅野 晃弘

今回のゼミ旅行は、人間社会ではなく、日本猿という一つの世界の中で、彼らがいかに生活しているかを見学することになった。

ここでは、生まれてくる猿にいわゆる奇形が発生している。この原因が、環境汚染、特に食品添加物や防腐剤によるものであるとするならば、これはやはり、人類に対する大いなる警告としてとらえなければならぬであろう。このモンキーセンターの存在は、そういった警告を少しでも多くの人々に知ってもらい、その対策が国の手で行なわれることを望んでいるように思う。

実際モンキーセンターに行き、それらの事が切実に感じられた。私は、モンキーセンターに行くまで、奇形ザルが多発していることに関してさほどには思っていなかった。むしろこの猿が、単なる観察の対象であるぐらいに思っていた。しかし実際に猿たちに接した私は、この地の猿集団の生活そのものに深い感銘を受けた。

ここでは奇形ザルが、他の猿たちと共に、一見通常の生活をしていた。このことについては、見学以前に話に聞いており、一応の予想はしていたものの、それは感情をもたない動物だからこそ可能なのだろうと思っていた。一般に、野性を残す動物の集団では、力のあるものがそうでないものを制しており、適応性を欠くものは死滅していく運命にある。その中でかろうじて人間だけが例外であろう。この猿社会も、そういった意味で奇形として生まれた猿は、スミの方へ追いやられているのではないかと考えていた。しかし私の見たところでは、かならずしもそうではなく、力のあるものが他のものを統治しかつ弱者を助けていたようである。その証拠に、母親が捨てた奇形の子猿をかなり権力をもつ猿（あるいはボス猿であったかもしれない）が育てていたことをはっきりと覚えている。このことは、この猿社会が、力関係ばかりでなく、「愛情」というべきものにも依存して成立っていることを意味する。そして、意外に複雑なこの世界には、モラルの存在すら感じられた。

さらに私自身感受性に乏しいせいかわ谷口先生が指摘されるまで気付かなかったが、猿たちが水飲場で手で水泡をつくり、それを不思議そうにながめてみたり、あるいは口にしている場面に出会った。彼らは、人間の場合と同じ意味で遊びを試みているのか、出来ては消える泡の中に夢を見ているのではないだろうか。実際そう思っても不思議でない情景であった。

このような情景の中で私には、淡路島モンキーセンターの猿たちが、彼らの

あるがままの姿で生き、あるいは来たるべき未来を予感しているような気がしてならない。何か現代の人間に欠けているものを彼らの中に感じた。

私は、この猿たちに接して、最初に述べた警告はもちろんのこと、それ以上にこの警告に触れた我々人類がどうあるべきかという問題についてのヒントをも与えられたような気がする。私たちは、自然を破壊し続け自らの生命をも危険にさらすという事態を招いてしまった。そしてそのことを猿に教えられるまで気付かず、今後人類はどうあるべきかを示されて、私にはこの猿社会に一種のせん望を感じることを禁じ得ないゼミ旅行であった。

### 討論のむつかしさ

甲南大学 理学部 一回生 杉浦 薫

何故か友人と一瞬、「行こうか」と、パッと意気投合してしまって、ゼミ旅行に参加しました。それは谷口先生という人間性との感動的な巡り会いでした。

初め私はゼミ旅行というものを、軽く考えていました。それが研究発表の討論を聞いた瞬間、それは全く自分と別世界であり、理解されることは何一つなく「自分の考えが甘かった」とただ打撃はひどく、私は暗中模索で、何一つ手がかりがなく、いつまでも明りが見えないままでした。それが、環境も違い、考え方も違い、今まで私の知らない人との巡り会いが、そのからを破りました。

ディスカッションの時、私は妥協がいやなので、それが正当として通っている意見を、私の主観で、おろかなことに、はっきりと反対してしまったりしました。でもグループの人の意見を聞いていると、ちゃんと理論が通っていて、今まで全くわからなかったことを、すっきりさせることができました。一貫している理論の一本の線が見えてきたときには、「あっ、これだ」と思いました。それは私にとって大きな収穫でした。

このゼミ旅行の間いろいろな事を考えさせられ、勉強という面でもまた、いろいろな人と、そしてその人たちの人間性に接して、このゼミ旅行は私にとってすばらしいものになりました。

## ゼミ旅行に参加して

神戸女学院大学 文学部 四回生 中村 恵理子

今回のゼミ旅行は、直前まで行くのを決めかねていたこともあり、私自身の目的意識が非常に希薄だった。そんなわけで、モンキーセンターに着くまでは、自分が何をしに来たのかははっきりしていなかった。(もちろん甲南の方の卒論発表は参考になりましたし、遊びも大好きなのですが……) 漠然と淡路島に奇形ザルを見に行く程度に考えていた私は、いったい何を問題にしているのかも全然わかっていなかった。奇形ザルを見たときも、ショックではあったけれど、心理学の実習で、重度の障害児を見てきているので、多少は驚きが少なかった。モンキーセンターの所長である中橋さん達のお話を聞いて初めて、その実状がわかり、この方がよほどショックだった。特に、中橋さんが、脅かすように、「奇形をよく産む雌猿は、S35~45年、つまりちょうどあなた方と同じぐらいに生まれた猿です」とおっしゃった時、私は、背筋がゾツとした。唯の推測だと笑えなかったからだ。実際に、目の前の猿達が証明してくれているのだから。

この問題は、前回の複合汚染Part 2 であり、大変大きな問題である。しかし私といえば、前回の教訓も半年で忘れ去り、これを書いている今も、目先の事に追われ、ほとんど頭の中になくという情けない状態である。「科学中心主義」の結果とか人類の存亡にかかわる等々実感としては、とらえにくい私ではあるが、遠からず母親になる身(?) として、なるべく、農薬や添加物の少ない物を食べるなど、自分のできる範囲で、地道に自衛していかなければならないと思う。それから、自分の子が、たとえ障害児であっても安心して生きてけるような社会を、微力ながら、作っていかねばならないと思う。

## ゼミ旅行について

甲南大学 経済学部 三回生 押柄 貞子

今回の淡路島モンキーセンターへのゼミ旅行に行くまでは、私はこれほどまで環境汚染を眼のあたりに見、意識し、深く考えたことはありませんでした。特にモンキーセンターのあった場所が非常に美しい青々とした海に近い緑の多い所であったため目に見えない、潜んでいる環境汚染が進んでいるのかと思うところとなります。

最も私に環境汚染の深刻さを意識させたのはあれほど自然が多いと思われる所の土が農薬等によって汚染されているということで、猿達があの土を食べると、彼らの体内が環境と同じように汚染され、このことが奇形猿発生の一原因になっているわけです。

海水のみでなくあれほどまわりに緑の多い所の土さえ汚染されてしまっています。人間は自分の生命を自ら危険にさらしているのです。

薬を使い、不自然な生産の仕方をして、不自然な農産物をつくり、それを食べる。とすると、「不自然」な子供が生まれてくるのは当然のことかもしれません。このまま汚染がどんどん進めばいったいどうなるのでしょうか。土の中にまで人間や猿や他のあらゆる生物にとって有毒なものが含まれてしまつては農薬を使わなくともその汚染された土から栄養分をもらう植物は毒され、有毒な果実等をつくり出すでしょう。又、海水が汚染されているということは人間の体の中の水分も同じように汚染されているでしょう。

人間に一番近い猿にこれほど多くの奇形が生まれていることは猿だけのこととは思えない深刻な問題であり恐怖です。

人間は環境を汚染してまで生産力を上げようとしています。自分の目先の利己的な欲のために、この種の欲は悪であるため、当然この欲によって良い影響や結果など期待できるわけがありません。この大きな欲のために人間は自ら自分に本当に必要な物を失っていきつつあるのです。

## 奇形ザルについて思ったこと

奈良高専 電気工学科 五年生 後藤 雅晴

それでも僕は自分を納得させる表現を見出せなかった。実際に奇形ザルを目のあたりにするまでは、確かに何か表現できるだろうと考えていた。だが、それは多少甘かった。僕はあのサル達を見ても自分で考えていた程の激しい感情を覚えなかったことに、一種の恥ずかしさこそ感じた。しかし、資料館で幼ない子供達ですらあっさりと表明できる素直な悲しみや同情心や怒りを感じることはなかった。僕にとっては、それ程にマヒした己れの精神こそがショックであり、内心秘かに大いに幻滅した。

あれからかなり経って、再び課題図書を読みなおしてみた。友人の話に刺激をうけたからである。彼の言うには、最近新生児の先天性奇形が増えはじめたという（彼の母親は病院関係に勤務している）。無頭児（脳のない奇形）や頭ガイ骨のない奇形児（脳が異状に肥大する）、末端部の奇形（モンキーセンターで見たサル達と同じ症状！）等々。しかしこれらはいずれも見て容易に判るものであり、先天性の各種機能障害などを含めると、実際は彼が言うよりももっと多いだろう。この時はじめて僕は明らかな怒りを感じた。同時に大いに恐怖を感じた。モンキーセンターのチラシには「次は人類の番」と書かれていたが、時はすでにおそく人類にまで及んでいるのではないか！

僕はもともと嫌煙家であり、環境破壊につながる内燃機関も好きでない。それに若干のゲテモノ趣味めいた動物好き（ヘビやトカゲすら飼ったことがある）も加えて、自然主義者を気取っていた。しかし、それは見せかけであり、実際の環境汚染に対しても注意を払っていたつもりでほとんど無知であった。鳴りをひそめた公害問題に関する議論とはうらはらに、あちこちで相変わらず有毒な殺虫剤が使用され、今まで人間のまきちらした汚染因子は生物ピラミッドの頂点である人間に集中しつづけている。車の排気ガスについても誰も言わなくなったが、有毒な成分がどれ程位減じたか具体的には誰も知らない（因みに、最近の車の宣伝に排気ガスにふれたコピーは見当たらないし、一見してスマートな各メーカーのエンジンの略称・・・プラズマとかレーザーとか・・・には、Clean（清浄）の“C”は一字たりとも含まれていない。この辺りにも僕を自動車から遠ざける理由の一つがある）。が、事実を知ってしまったが最後、今では街の空気を吸うのも、自販機のジョースを飲むのも恐ろしくさえもある。政府の環境調査も当にならず、本当に安全なものは何一つないように思える。

僕は多少いら立っている。このままでは致命的な危機は避けられない。しかし、どうしたらよいのかは全くもってわからない。既にあともどりできないところまで汚染が広がっており、多くの人々が僕のように感覚に目かくしをされ、現実を目を向けない。

ゼミ旅行中の討論の中に「知ることによって、何かが始まる」という言葉耳にした。それは同時に「無知こそが全ての過ちの根源」ということを意味していると思う。奇形ザルのショックにしても、あのときはただ無形の衝撃でしかなかった。ただ、少しのかけらでもショックに感じた僕は幸運であったと思う。しかし、僕のようにしか感じられなかった人は割合多かったのではないか（そうでなければ幸いだが）。救われる道はきっと、あの子供達の感想のような、ごくあたり前の人間としての驚きや怒り、生きる物への愛情からはじまっているに違いないと信じたい。なにができるというわけではないが、僕はもっと知るべきであり、他の人々はもっと気づくべきである。僕は自分に思いつくことしかとりあえずできないけれど、目の覚めた人が多い程いい考えが出て来るにちがいないから。



C グループ・メンバー

代表者 谷口 竜平

脇田 博代

大森 優香

桜井 智晴

植木 通博

## 奇形ザルが教えてくれたもの

甲南大学 理学部 一回生 脇田 博代

淡路島モンキーセンターでの奇形ザルたちとの出会いは、私の内部に予想以上の衝撃をもたらした。研究用のケージに入れられた彼らの目は、私たちに何を訴えていたのだろうか。これから生まれてくる新しい命のためにも、私たちがこれから何を考えたらよいか、今回、私たちは重大な課題を与えられたのである。

モンキーセンターで経験してきたサル社会には、私たちにとって、サルたちから大いに学ぶべき姿があった。人間社会に欠けているもの、それは愛情ではないだろうか。サルたちはけっして仲間の奇形ザルを見て、「お前の手足は変な形をしている。キッキッキー」などと言って指差して笑いはしない。むしろ奇形ザル自身にとっても、仲間たちにとっても、“奇形である”という観念はないのであろう。サルたちが、奇形ザルをかばう行為も、奇形だからではない。弱者をいたわる純粋な愛情からではないだろうか。それが人間社会においてはどうかであろう。幼稚園に入ると子供たちに指を差され、大衆の中では振り返って見られ、「かわいそうに」とささやかれる。その目には哀れみと同情が含まれているだけだ。そして身体の不自由な人を“見て”、自分が五体満足であることを感謝する。何てすさんでしまっているのだろうか。私自身の反省である。しかし、これからは、心底から彼らの立場に立てるだろうか。いいえ、半分も立つことはできないだろう。五体満足で生まれてきたことが幸せなことで、そうでなく生まれてきたことが不幸せなことなのだろうか。そうではない。すさんだ心しか持てない私たちの方が、心の奇形児なのだ。文明開化を急ぐあまり、私たち人間は、とても大切なことを忘れてしまっているような気がする。

現在の生活、社会は、科学の発展と進歩のおかげである。しかし、その発展と進歩は、今や、人間の無謀な野心のために、“利用”されています。その一例が、農薬散布の問題であろう。淡路島モンキーセンター所長の中橋実氏のお話や、見せて頂いた資料によると、奇形ザルが生まれてくる原因として、遺伝によるということよりも、えさに付着した農薬が一番疑われているそうである。浴びるように散布された農薬の類は、水で洗っても落ちない。（また、水道水は、消毒のために入れる塩素によって野菜類のビタミンCをほとんど洗い流してしまい、という実験結果が出ている。）食物といっしょに体内に入った毒物は、そのまま蓄積されてしまう。様々な種類の薬品が、体内で、そ

して地球上で、予想もしない化学反応をし、複合汚染し、自然を死にいたらしめるのだ。農業の合理化のためになされる農薬の空中散布による恐怖は、R.カーソンの「沈黙の春」に述べられている。

以前、ある新聞の読者の投稿する欄で読んだのだが、主婦の「田舎の家の庭の、無農薬の柿の味が忘れられない」という投書に対し、後日、一人の農家の人が、「農薬を使わなくては人件費がいる。形の良い野菜、果実でないと売れない。作物に付く害虫をいちいち手で取っていたら生活していけない」と反論していた。その後の賛否両論があったのかは記憶にない。農家の人々にも生活がかかっているのだから、この意見ももつともなのかもしれない。しかし現在消費者は賢くなってきている。先日、厚生省は、合成添加物を使用した食品に、原則として「サッカリン」など個別の物質名を全面表示させていくことを決めた。これも消費者の自覚の現れだと思う。また、消費者は、生活協同体をつくり、合成洗剤、合成添加物、農薬などの危険性を、様々な、子供にも理解できる実験結果にして発表し、地域の住民に訴えかけている。テレビなどの公共施設を利用し、国民に訴えかける動きも出ている。こういった運動の高まりとともに、私たち一人一人の自覚が大切なのだ。

人間に近いサルたちが、人間と同じ食べ物を食べて身体に支障を来した。ならば、サルに近い形をしている人間が、彼らと同じ経路をたどる可能性が全然ないとは、否定できない。毒の衣服をまとった作物を人間がたべるのは危険だからと、動物の飼料にする。そうして育った動物を私たちが食物にする。結局は私たちの体内に入るのだ。しかも間接的であればあるほど蓄積量は増えていく。それがわかっていてなぜ誤ちを繰り返すのか。害虫と農薬のイタチゴッコは、農薬の最低限度の濃度をどんどん濃くしていく。科学は利益を追求するだけの学問であってはいけない。科学は私たちの生活に密接に結びついている。それ故に、私たちの安全を追求する学問であってほしい。自然を征服するなど絶対に不可能なのだから。

私たちはこのゼミ旅行で、大変貴重な事を教えて頂いた。それはモンキーセンターの関係者の皆様と、サルたちにだ。猛暑の中、お忙しいにもかかわらず、私たちのために時間をさいて下さったのお話を決して忘れてはならない。決して無駄にしてはならない。私たちの健康と私たちの自然は、私たち自身が守らなければいけないのだから。

最後になりましたが、本当にありがとうございました。コータ君と遊べなかったのは残念でしたが、いつまでもコータ君が元気ですように……。

追手門学院大学 心理学科 二回生 大森 優香

中学校の時、クラスに右手の親指のない子がいた。彼女はずっと右手をグーにしている、私は全く指の事など気付かなかった。彼女と創作ダンスで同じ班になった時、たまたま“掌をひろげる”振りがあった。彼女は決して手を開こうとせず、班長だった私は頭にきて、どうしていつもグーなのか、と責めた。人前で大ゲンカができるほどの彼女なのに、その時は反論もせず、ただ笑っていた。

親指がない事を知った時、私は申しわけなく思いながらも、そんな不自然なまでに隠すことはないのにと考えたのだ。では、もし彼女が自然にふるまっていたら——。私たちの目はその異形のもを無意識に見つめ、その視線は彼女を傷つけたかも知れない。

まだまだだ。障害者もそれを受け入れる側も、そういった事実を受けとめる心の基盤ができていない。淡路島のサルのならた手足と彼女のグーの手がオーバーラップする中で、こう思った。

一番ショックだったのは、私と同じ頃に生まれた雌サルが奇形を生む確率が高いという事実である。初めて自分と“奇形”という言葉が直接に結びついている事に気が付き、私は正直、焦った。どれほど話を聞いても、実際に目で見てもそれまで保たれていた自分との間の一線が消えた。自分は五体満足の子を産むものと漠然と信じ込んでいたのが、見事にくつがえされた。

家に帰って早速、愛猫のキャットフードを点検したら、主要原料しか示されていない。私たちが食べるものは注意して買っていたが、ネコ用に買うカボコなどには必ず添加物が含まれていた。ひどいものは原材料も書かず、上もちだけ保障してある。———気を取り直して、翌日から魚とごはんを混ぜてネコ皿に入れた。そしたら今度はネコが受け付けない。キャットフードやカボコのおいさに慣らされているのだろう。2~3日続けたら、近所のゴミ箱を荒らし始めたので、キャットフードに戻ってしまった。どこかおかしい。何か狂ってる。ネコ皿にのった魚ごはんは、今日も少し減っただけで固くなってしまった。

## 環境汚染についての自覚

甲南大学 経済学部 二回生 桜井 智晴

私は一回生の頃から谷口先生の講義を受け研究室にも幾度も出入りさせてもらっていました。そして何度か「ゼミ旅行へ参加しなさい」と言われてきましたが、「ゼミ旅行」(＝勉強)と聞くだけで遠慮がちでした。だが今回は、「息ぬき程度だ」という先生の言葉を信じて参加に踏み切ったのでした。

今回のゼミ旅行は谷口先生が以前より問題意識として持っておられた「公害問題・環境汚染」を取り上げ、奇形ザルの多く発生している淡路島モンキーセンターへ研修旅行に行きました。

まず、モンキーセンターで実際に奇形ザルを目の前にして、奇形ザルがたいへん群れにとけ込んでおり、「人間社会とはやや異なっているな」という皮肉めいたことを考えつつモンキーセンターの所長である中橋氏に連れられ説明を受けたのでした。話が進められていくうちに奇形ザル——指が6本あったり、手足が無い——に起こっている事がたいへん身近なことに感じられてきました。

中橋氏の話によれば奇形ザルが現われ始めたのは1955年、九州の高崎山においてで、えづけを始めて3年目であるということでした。つまりえづけに使われたエサについていた農薬が最も有力な原因と考えられているのです。私はこの様な問題を以前から知らなかったわけではありませんが、コータという手足のほとんど無いサルを目の前にして大きなショックを受けました。農薬などが原因ならば、すぐに我々人間にもこのような障害——現に水俣病など——が出てくるのは当然のことであり、過去何千年・何万年という長い歳月をかけて今日の姿に至っている我々人間も含めた多くの生物が環境汚染、さまざまな有害物質といったこと数十年の間に人間の手によって作られたものにより奇形を生じ、その姿をゆがめられていくのは恐ろしいかぎりです。まさに人間は自分の首をしめているに違いありません。現在の私達の生活は食生活に限ってもさまざまな危険をはらんでいると思います。食品添加物、着色料などといった類のものを使用し、目先の美しさ、便利さにとらわれていますし、同じことが政府などの公的機関の奇形ザル問題に対する冷遇にも現われています。人間がこのような見せかけの「便利さ」・「豊かさ」に慣れてしまうことが本当に恐ろしいと思います。なぜなら「慣れる」ということが、無関心、無関係につながり、たとえば人間が自然を独占し、自然をも支配下に置くことに慣れ、身近なところでは即席ラーメンなどを食べることは体に害があるのに食べてしまったりするといったことは、非常に危険であると思えます。

そこで私達はもう一度立ちどまり、この「慣れ」をふり返って現在の我々の置かれている立場を考えてみる必要があります。このように考えるとこの奇形ザル問題を通して、中橋氏も言っておられたように「自然とともに生きる」ということを考がえていかねばならないと思います。私は、自然というと単純にも「うさぎ追いしかの山、小ぶなつりしかの川……」で始まる「ふるさと」を思い出しますが、(少々意味がずれているかもしれませんが)まさにこの詩のような自然を大切にし、子孫が安心して生活してゆける環境を残したいと思います。

以上が今回のゼミ旅行で、モンキーセンターを訪れた感想であります。実際自分の目で見て、自分がこのような問題に対して無関心であったことに気づくことが出来たことだけでも参加した意味があったと思います。

#### ゼミ旅行に参加して

甲南大学 理学部 二回生 植木 通博

今回のゼミ旅行では、淡路島モンキーセンターで、多発しているという奇形ザルを見学することが、主目的であった。センターでえづけされているサルは、一見ただけでは、なんら異常があるようには思えなかった。しかし、目が慣れてくると、四肢の一部がミラー・フットになっていたり、手首から先がなく棒状になっている奇形ザルが、正常のサルに混って結構いることに気がつくようになった。写真で、このような奇形ザルを見た時には、その異様さに目をそむけたくなくなった。ここで、奇形を持ったサルが、不自由な手足を使ってえさを食べたりぎこちなく走ったりしていながら、しかも、群れのなかに完全に溶けこんでいる姿を、実際に見たときには、異和感を感じなかった。

センターの中橋所長の話しによると、奇形ザルは、全国の野猿公園で、かなりの高率で発生しているとのことだった。原因についての調査も行なわれており、現在では、奇形ザルの発生は、遺伝によるのではなく、環境にその原因があると考えられているという。つまり、サルのえさか飲用水が、何らかの原因物質を含んでいて、それが、母ザルの胎内での成長過程に作用して四肢異常を生みだすらしい。

かんじんの原因物質が、いったい何であるのかは、よく解っていないが、その有力な候補としてやはり農薬や除草剤といった化学物質が挙げられると思う。科学技術の発達に伴って、私たちの身のまわりには、天然に存在しない数多く

の化学物質が、存在するようになった。それらの物質の個々の安全性については、一応、検討されているが、多くの物質が複合的に生物に作用した場合に、安全と言い切れるかは疑問だ。また、製造された段階では、たしかに安全であっても、その後化学的変化を生じて、危険な物質に変化することも考えられる。実際、ゴミ焼却炉の中で高熱によって、ベトナムの枯葉作戦で悪名を高めた催奇物質で強力な発ガン物質でもあるダイオキシンが生じているということを新聞等で知っておられる方も多いと思う。

科学技術の質的、量的両面での急速な発達によって、ヒトやその他の生物が悪影響をうける機会が増えつつある。その一つの例が、この「奇形ザル問題」と言えるだろう。

科学技術の発達の度合と比べて、生命に対する知識のそれは、著しく遅れている。卵細胞が分裂をくりかえし、分化して完全な個体となっていく発生過程は、基本的なメカニズムさえ、非常に多くのナゾにつつまれている。この科学技術の急速な発達と生命に対する理解の著しい不足というアンバランスが、種の公害問題の底にあると思う。私たちは、科学技術の悪影響が、生命活動に及ばないように、できる限りの注意と努力をせねばならない。

(不参加者からの投稿)

「沈黙の春」の感想文

甲南大学 文学部 四回生 岡本 由美

生きて生命あるものは全て、必要なものを取り入れ、不必要なものを排せつする。これが無生物との違いだ。

今、生き物の、食べるという生命を維持する最も根本的なことが、生態系にまかれた化学薬品のために脅やかされている。もうこれ以上化学薬品の雨を降らせてはいけな分ってはいるが、その雨を止められず、人は薬品洪水におぼれそうになっている。「沈黙の春」の中で、そんな「魔法使いの弟子」のようになっている人間の姿を実例を上げて示している。

人が化学薬品を作り、使ったため毒を含むようになった食物連鎖は、人間の他者への冷淡さが、その様な形となり表われ、人間自身に降りかかって来ているのではないだろうか。人間が必要とし、それによって生きている優しさというものが虫ばまれていることではないだろうか。それは、人間の生きようとする意志が虫ばまれていることではないか。生命あるものは、全て優しい。これが無生物とのちがいだ。

優しくなるとは、他者の立場で考え、言葉にし、行為することだ。「めんどろなことはやめておこう」という心の平安を破って、心の中に行動を起こすことだ。外への強い働きかけだ。だから優しくなることは、苦しいのだ。面倒なのだ。

それでも、優しさというものは、人の中にあるものだから、人は優しくなりたいのだ。だから冷淡でいると苦しむ。少し優しくなることが、苦しいとはいっても、やはり優しくなることを望む。生きることが苦しいとはいっても、生きることが望むように。

生態系を生き返らせるには、人が精巧な網の目のようになった生物界の助け合いの中で生かされていることを知り、一人一人が自分の持ち場で、もう少しだけ他者を思いやるようになればいいのだろう。これが、自分が作った薬品におぼれている、魔法使いの弟子の魔法を解くじゅ文だ。

生態系を大切にすることが、人を大切にすることになり、それは自分をも大切にすることになる。生態系を大切にすることと、自分を大切にすることが同じなら、生態系が生き返る時、人も生気を取り戻すのだろう。



## 「複合汚染」をよんで

甲南大学 文学部 三回生 川崎 智恵子

複合汚染とは、二つ以上の毒性物質の相加作用及び相乗作用のことである。

私たちは、毎日、農薬や添加物の入った食品を食べ、排気ガスや工場の排煙などで汚染された空気を吸って生きている。これらを総合すると、一日に何百種類の科学物質を体内に入れていることになるのである。一つ一つの物質に関して言えば、体内に入る量は、ごく微量で生命を脅かすものではないが、長期にわたり蓄積されると、許容量を越えることになる。また、ある物質が他の物質と結びついて相乗作用するとしたら、一体、どれほどの数になるのだろうか。現在、このことは、ほとんどといていいぐらい、わかっていないそうである。

毒性物質の作用として、表面化してしまっているものが、いくつかある。イタイタイ病、水俣病、その他の公害病などである。表面化する前に知ることができていたなら、多くの人々が苦しまずにすんだのではないか。いや、毒性物質の作用を知っていれば、人間が使うこともなく、表面化することもなかったらと思う。人間は、作用もわからないようなものを何百種類と、毎日、食べている。これでいいのかと思う。

ところで、私は、ゼミ旅行には、参加していないのだが、奇形ザルを何度かテレビで見たことはある。手がなかつたり、足がなかつたり、指がなかつたり、と自然の猿の姿でなくなってしまうのである。奇形ザルたちの姿を見て、ただ、すまなく思う。人間が自分たちの欲だけのために、文明を発展させ、その結果、自然を破壊させてしまったことの犠牲になったのではないかと。

猿だけではなく、人間にも四肢障害が増えている。サリドマイド児という薬害によるものやその他によるものもある。これらは、複合汚染の表面化ではないだろうか。このように表面化してもなお、人々は、恐ろしさに気づいていないようである。奇形ザルの姿を見て、何とも思わないのだろうか。仮に、思ったとしても、もう人間にはどうすることもできないのであろうか。不安になるばかりである。

卒業論文要旨

梅田 良子

西川 津也子

シュールレアリスムにおける哲学的認識の問題について  
—— マグリット絵画に視る夢と現実の接点 ——

甲南大学 文学部 社会学科 四回生 梅田 良子

序

絵画とは、ある種のイメージの表現であり、それを見ることによって、私達は未知の世界をかいま見新たなイメージを受け取ることが可能である。

そして、そのような出来事を経験するとき、私達は今まで思考の対象となり得なかったもの、認識することが不可能であった事象の、存在の可能性に気づかせることが少なくない。

このような経験においては、その絵画は従来の私達の知覚（この場合では視覚に限定される）、もしくは思考の秩序に背いたものであるほど、私達は動揺させられる。

そして、その絵画は私達が、現在、視覚によって認識している世界像そのものに対して、視覚を通して大きな疑問を投げかけてくるのである。

ここで、私は視覚と思考との関係を明らかにした上に、具体的に、超現実主義 (surréalisme) 運動の画家、ルネ＝マグリット (René Magritte, 1898-1967) を取り上げ、彼の作品の中に、私達の思考が対象となし得なかったものの存在を探る手がかりを求めていきたいと思う。

(目次)

序

第一部 視覚的思考とシュールレアリスム

第一章 視覚の限界I

第二章 視覚と思考

第三章 ダダとシュールレアリスム

第二部 マグリットにおける思考の死角

第一章 マグリットの絵画世界

第二章 「人間の条件II」

第三章 視覚の限界II

第四章 視覚以外の感覚の働き

第五章 総合的判断

第六章 整合性

## 第七章 確率

## 第八章 総合的判断の不確実性

### 結び

### 註

(中略)

### 結び

私達の思考は、近代文明社会において、その情報源として、視覚的にとらえられる事象にかたよって考えられてきた。すなわち、私達の思考は、その対象として、統一的にとらえ易いもの、または、容易に秩序立ててとらえられるものを選択しようとする傾向にあった。

このように、合理的なものだけを思考の対象としてとらえ、そこから考察を始めようとするならば、当然、非合理的なものは思考の対象から排除される。そこにこそ、思考の死角が存在するのではないだろうか。

非合理的なもの、例えば夢や感情などの感性的なものは、確かに、秩序立て、統一的にはとらえにくい。

しかしながら、それらは、実際に、私達の身近に存在し、私達と深い関わりをもったものである。

思考が、より普遍的で統一的なものになるためには、容易に思考の対象となり得ない、これらのものに対しても眼を向けることが必要なのではないだろうか。

合理的なものとは非合理的なもの、理性的なものとは感性的なもの、そのどちらに対しても思考の対象としての存在価値を認めることこそが、大切なのではないだろうか。

シュールレアリスムは、非合理的なもの（例えば夢のような）の存在を正当化した点において、私達の認識に対する功績は大きかったといえよう。

しかしながら、多くのシュールリアリスト達は、夢や無意識の世界に固執するあまり、今度は、現実、意識世界が、思考の死角となってしまったようだ。

けれども、マグリットは、現実から離れようとはしなかった。彼は、現実と夢とのちょうど接点に位置し、合理的なものとは、非合理的なものとを、同一画面上に表そうとしたのである。

彼の絵は、そういう意味において「窓」もしくは「扉」であり、そこに私達は、夢と現実の両方の世界を視ることが可能なのである。

彼にとっては、現実の中に非合理性が存在し、同時に、夢の中に合理性が存在しているのである。

私は、この論文において、彼の絵画の世界を分析し、彼の暗示を論理的に解明しようという試みを敢えて行ったが、本来、芸術は、直観的に解されるべきものであるという私の見解はかわらない、ということを加えて結びとしたい。

人間本性および自然法について  
——ルソーの「人間不平等起源論」をめぐって——

甲南大学 文学部 社会学科 四回生 西川 津也子

(目次)

- I 自然状態について
  - (1) ルソーの描く自然状態
  - (2) ホッブズの描く自然状態
  - (3) 両者の比較
  
- II 自然状態から移行する社会について
  - (1) 自然状態から社会への移行 (ルソー)
  - (2) 社会へ移行するなかであらわれるルソーにとっての理性と感情のかわり
  - (3) ルソーと比較されるデカルトの理性
  
- III 自然法について
  - (1) プーシェンドルフによる自然法
  - (2) ロックによる自然法の認識
  
- IV 結び
  - 私自身のルソーの解釈について

(序論)

合理的にすべてをわりきって考えたなら、切りすてられた部分はいったいどうなるのだろう。切りすてて残ったもののみが、果して真であると言えるのだろうか。そして人間はそのようにすべてをわりきって考えていけるものなのだろうか？すべての人間に共通の本性というものがあるなら、それはいったいどのようなものだろう。

ルソー (Jean-Jacques Rousseau 1712~1778) は「人間不平等起源論」のなかで、人間の本性に「憐れみの情 (ピチエ)」という生得的な感情を与えている。そしてそのような感情を与えられた「自然人」を、理性的存在ではなく感情的存在として描いている。自然状態のなかで、彼は孤立した状態にあり、ほとんど何の知識もなく、未来の観念もなく、肉体的欲求のみで生きている。孤

立している彼らの間に社会というものは存在せず、したがって、彼らの間には何の関係もないように思われる。しかし、自然状態において彼らを結びつけるものがあり、それが「隣れみの情」であるという。この「隣れみの情」という感情は、上下関係も、何の利害関係もない自然状態にあっては、純粋に他者と感情をともにし、苦しむ者の身になってみる感情なのである。自然状態での人間と、その結びつきを、ルソーはこのような感情においてとらえるのである。

そしてまた、ルソーにとって「隣れみの情」という感情は、生得的であり、不変でもある。それゆえに、社会のなかでも存続するものである。一方、自然状態から社会に移行するなかで、あらわれるのが理性であるとルソーは考える。そのような理性は、一見、絶対性をもたず、相対的な理性であるようにも理解できるのではないだろうか。また、ルソーが「人間不平等起源論」のなかで、理性というものを否定的にとらえていることから、ルソーは非合理主義者であり、感性論の立場にあるとして受けとられるかもしれない。しかしルソーは、理性そのものを否定するのではなく、人間の自然の感情、人と人とを純粋に結びつける感情をとじこめてしまっている理性的なもの（自尊心＝アムールブロボル、社会的欲望）をひき出した社会というものを批判するのである。ルソーにとって、理性は人間悟性と情念からひき出されるものであり、また誤まることのない生得の感情に支えられ、相互にかかわるものである。したがってそのような理性もまた絶対的なものになり得る。加えてルソーは、自然状態においても、潜在的な自己改善能力としての理性の存在を認めているのである。

しかし、私はここで、ルソーを合理主義者としてとらえようとしたのではない。ルソーが人間の本性に、純粋に人と人とを結びつける感情を与えたことを、感情に優位を与えたことに私もまた共感するのである。そしてさらに、感情を認めたことで、ルソーは、感性、理性ともに受け入れることができたのだと思えるのである。すべてをはじめから疑ってかかり、切りすてていくのではなく、まず、どのようなものでも、切りすてる前に受け入れ、認めていくのである。切りすてられた世界、背後にある世界に目を向け、世界を広げ広い範囲で事物をとらえ直そうとする。しかし、なおかつそこから絶対的なものを求めていくのである。このようにルソーを解釈することで、私自身の立場もまた、ルソーの中に見い出せるのである。合理的にわりきろうとしても、わりきれないのが人間である（私はそう思う）なら、そのことを、常に認めていかなければならない。しかし、やはり合理的な立場であることにちがいないばかりでなく見方を変えれば、巧妙な合理主義の立場、とでも言えるのかもしれない。けれども、これ以上の立ち入りはしようとは思わない。今後は、現実の社会において、人と、そのかかわりを実感していくのだから。ここでは、さきほどの私

自身のルソーの解釈によって一応の結論としたい。

(以下省略)



甲南大学谷口研究室 昭和 58 年度年間活動報告

1. 講義および演習

- ①哲学（哲学と科学, 行為論, 人格論, 幸福論, 生と死）
- ②西洋哲学史II（18世紀の哲学：ロック, ルソー, カントを中心に）
- ③文献演習（Adam Smith: The Theory of Moral Sentiments）
- ④ゼミ（中村雄二郎「感性の覚醒」, ルソー「エミール」）

2. 研究発表

- ①谷口文章「アダム・スミスの感情分析における評価二元論の問題について」  
甲南大学紀要、文学編47, 1982.
- ②卒業論文  
梅田良子 “シュールレアリスムにおける哲学的認識の問題について  
——マグリット絵画に視る夢と現実の接点”  
西川津也子 “人間本性および自然法について  
——ルソーの「人間不平等起源論」をめぐって”

3. ゼミナール合宿

- ①第六回ゼミ合宿（昭和 58 年 3 月 19～21 日, 於：I U S K）  
研究発表会 (1)哲学・・・ルソー「社会契約論（第一篇）」  
(2)心理学・・・エンカウンターグループ実習  
(3)教養・・・有吉佐和子「複合汚染」
- ②第七回ゼミ合宿（昭和 58 年 7 月 26～28 日, 於：淡路島モンキーセンター）  
研修およびシンポジウム  
卒論中間報告
- ③第八回ゼミ合宿（昭和 59 年 3 月 23～25 日, 於：I U S K）  
研究発表会（予定）

\* I U S K = 関西地区大学セミナーハウス

4. 昭和59年3月4日、第一回同窓会（谷口会）開かれる。於大阪。参加者34名。実行委員：佐保田圭吾、高井賢一、藤松 昭。

研究室に何らかの形でかかわるOBおよび現役学生たちの楽しい集いであり、盛会のうちに懇親を深めた。

※本年度の研究室活動にあたってゼミ幹事の**大野幸彦**、**押柄貞子**の両君の尽力に感謝します。

## 編集後記

第七回ゼミナール旅行報告書がようやく出来上りました。今回は、淡路島モンキーセンターへ出かけて行き、毎回のよな教師・参加者相互の刺激だけでなく、私たちにとってまったく新しい、日本ザル社会からの強いショックを受けた後の報告書ですから趣きも今までとは違ったものがあると思います。

また、特筆すべきことは、第一回報告書発行の後、絶えてなかった活字印刷を行なつたことです。スタッフの大半は、和文タイプライターをさわるのは始めてとあって、最初ははりきっていたのですが、遅々として進まず、それでも若い力を結集して、結局今回もギリギリの線でゴールイン!! 本誌製作の秘話を数え上げればきりがなほほどですが、それだけに私たちの日には、最高の出来栄えに見えます。皆さんいかがですか? 次回からもこの路線で報告書作製を行ないますので読者のみなさん応援して下さい。

最後になりましたが、私たちのために貴重な時間を割いて熱心な御説明を下さいました、淡路島モンキーセンター所長の中橋 実氏および大阪大学人間科学部：中道正之氏、そして多大な犠牲をはらって御指導下さいました甲南大学文学部：谷口文章先生、ならびに御協力下さいました各位に厚く感謝の意を表します。

昭和59年3月

編集代表者 藤松 昭  
和田浩一

### 第七回ゼミナール旅行報告書

編集者	大野・高井・村上・和田・万野・迎 黒川・植木・藤松・脇田・杉浦・他
発行所	甲南大学谷口研究室 ☎078(431)4341
発行日	昭和59年3月22日 初版発行
印刷所	甲南大学コピーセンター

( 無断転載・引用禁止 )